

原著に即した ストレンジ・シチュエーション法

伊崎 純子¹

問題と目的

Ainsworthが同僚とオリジナリティあふれる研究を開始したのは1960年代のことである。Ainsworthが創案したストレンジ・シチュエーション法は、アフリカのウガンダ共和国で母子を自然観察した結果とアメリカのボルチモアで母子を自然観察した結果とを比較したことに端を発すると言われる。慣れた場所でも強いアタッチメント行動を示すウガンダの乳児と、慣れた家では探索を楽しむボルチモアの乳児の行動の違いは、2つの育児文化の違いによって生み出されると考え、Ainsworthらはアメリカの中流家庭の白人母子を対象に、慣れ親しんだ家庭環境ではなく乳児のアタッチメント行動を引き出す実験場面を創案するに至った。そして、その研究方法はBowlby (1969) が提唱したAttachment (アタッチメント/愛着) を実験的に確認する方法として研究が重ねられ、最終的にAinsworth, Blehar, Waters, & Wall (2015, 原著1978の再版) がストレンジ・シチュエーション法 (Strange Situation Procedure; 以下、SSPと略す) として確立する。

これまで、筆者は何度か実際にSSPとして、日本人母子のデータを収集してきたが、改めてAinsworth et al. (2015) にあたったことで、自分たちの方法は予期せずアレンジされたものであり、原著に忠実なものではな

¹白鷗大学教育学部
e-mail : juniza@fc.hakuoh.ac.jp

かったことを理解した。そこで、本稿では、原著におけるSSPの方法、邦文で紹介されたSSPの方法、筆者らの擬似SSPとの相違点を明らかにすることを目的とする。

方法

主に文献調査。1985年以降に公表され、Google Scholarでヒットした文献及び、自身の研究方法（伊崎・小林，2019）を比較して総括する。

結果

1. SSPの方法について

Ainsworth&Wittig（1969）が公表したSSPは2回の母子分離と母子再会を含んだ8つのエピソード場面で構成され（表1）、古典的な類型ではA（Avoidant；回避型）、B（Secure；安定型）、C（Ambivalent／Resistant；アンビバレント型）の3つに分けられる。

表1：ストレンジ・シチュエーション法（Ainsworth et al, 1978, 2015）

エピソード番号	登場人物	時間	行動の概要	
1.	母親 乳幼児 実験者	30秒	実験者が母親と乳幼児を実験室に案内して場を離れる。	
2.	母親 乳幼児	3分	乳幼児の探索を母は見守り、必要であれば2分後に遊びに誘う。	
3.	見知らぬ人 母親 乳幼児	3分	見知らぬ人（Stranger）が入室。初めの1分、静かにストレンジャーはその場にいる。次の1分、ストレンジャーは母と話す。最後の1分ストレンジャーは乳幼児に関わる。3分後、母はそっと退室する。	
4.	見知らぬ人 乳幼児	3分か それ以下	ストレンジャーの行動は乳幼児の行動に合わせる。	1回目の分離 過度に悲しむときには時間を短縮する
5.	母親 乳幼児	3分か それ以上	母親が入室し、ストレンジャーは退室。母親は乳幼児の機嫌を直し、落ち着いてもう一度遊びに向かうように関わる。それから母はバイバイを言いながら退室する。	1回目の再会 再び遊び始めるのに必要であれば時間を延長する

6.	乳幼児のみ	3分か それ以下	児一人になる。	2回目の分離 過度に悲しむときには時間を短縮する
7.	見知らぬ人 乳幼児	3分か それ以下	ストレンジャーが入室し、乳幼児をあやす。	分離の継続 過度に悲しむときには時間を短縮する
8.	母親 乳幼児	3分	母親が入室し、乳幼児を抱っこする。しばらくして見知らぬ人がそっと退室。	2回目の再会

3 類型にはさらに下位分類があり、A1/A2,B1/B2/B3/B4,C1/C2の 8 つに分類される。その後、Main& Solomon (1990) が追加したABCいずれの群にも分類されないnot-ABCをD (Disorganized/Disoriented; 無秩序・無方向型)として含めたA/B/C/Dの 4 分類が現在は支持されている(表 2)。

表 2：アタッチメントの分類 (Ainsworth et al., 1978 & 2015; 梅村, 2017)

	4 分類	Ainsworth 他
不安定型	回避型 Avoidant	Aグループ 母親との近接・関わりにおいて無視したり、ちらっと見るだけだったり、背を向けたりする。母親との再会時も、母に接触を求めることがほとんどなく、2回目の再会時にその様子が顕著である。見知らぬ人を母と同じように扱う。 下位分類 A1：再会時、無視するなどして母親を避ける。無視しない場合でもちらっと見る程度。 A2：再会時、母親へ近接するが、途中で母親から離れる。もしくは通り過ぎるなど回避的な行動を示す。
	安定型 Secure	Bグループ 多くは遊びが活発である。母子分離時、母親を求めて後を追いかける。再会場面では母親に抱きつき、興味のあるものを分かち合おうとする。再会により容易に情緒は沈静化し、すぐに自分の遊びに戻る。 下位分類 B1：ぐずりや泣きなどのネガティブな情動をほとんど見せないが、距離を保ちながら親と積極的なかわりを示す。 B2：ネガティブな情動をあまり見せないが、母親へ近接・接触する。 B3：積極的に近接・接近し、ネガティブな感情を沈静化した後、探索行動に移行していく。 B4：ネガティブな感情が高く、強い近接・接触行動を見せる。B3よりも探索しない。
不安定型	アンビバレント型 Ambivalent /Resistant	Cグループ 母子分離時、強い不安や葛藤を示し、親との再会時には強く身体接触を要求する一方、抱き止められても怒りや攻撃を示し、沈静化しない。慰めてもらいたそうにする反面、他の乳児の比べ、より怒りや攻撃を示す。 下位分類 C1：抱き上げるとのけぞり、おろせというように、母親との接触に抵抗する。母親をたたかなどの怒りを表す。 C2：SSPの全場面を通して、探索行動が極端に消極的。母親との関わりも受動的。

不安定型	無秩序・無方向型 Disorganized /Disoriented (Main & Solomon, 1990)	Dグループ ABCと並 列して、D かDでない かを別に 評定する	母子分離時、ロッキングをしたり床にゴロゴロ寝転がったり、 ドアの前で泣きながら親を呼んで苦悩を示す。一方で再会時、 顔を背けつつ親に近づく、おびえながら突然後ずさりする、お びえながら手を左右に投げ出したり顔や口の前に持つてくる、 頭をひっこめたり肩を丸めながらドアや母のところから走り去 るなど意味不明な行動が確認される。
------	---	--	---

2. 日本におけるSSPを用いた研究の歴史

2023年2月末現在、論文検索エンジンのGoogle Scholarにて「ストレンジシチュエーション」をキーワードに検索をすると171件の論文がヒットする。そのうち、2021年以降の論文が20件（およそ年間10件ペース）、2001年～2020年が124件、1981年～2000年が27件、1980年以前はヒット0である（図1）。1980年以前は愛着をキーワードにすると2500余りの論文がヒットするが、「農民土地愛着心冷却の傾向」（河田，1923）なども含むため、母子間の愛着とは限らない。アタッチメントをキーワードにすれば20,600件が1980年以前にヒットし、2019年以降でも16,900件がヒットする。以上を踏まえると、1980年以前に母子間の愛着やアタッチメントを研究していたとしてもSSPに関わる知識を有している日本人は限られており、21世紀に入り日本で注目されるようになったと考える方が妥当であろう。

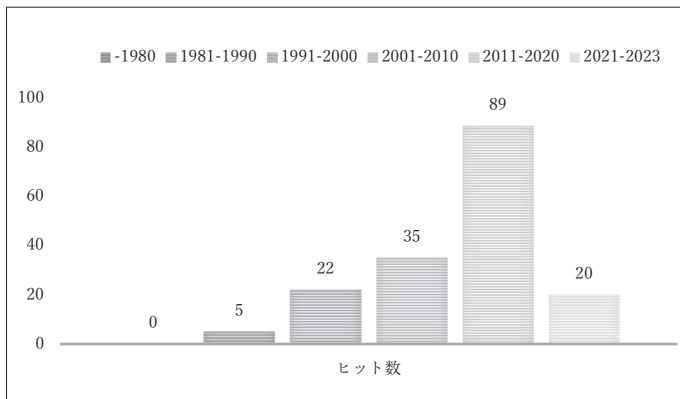


図1：ストレンジシチュエーションの論文検索ヒット数

Google Scholarで検索される、「ストレンジシチュエーション」をキーワードにした最も古い年号の論文は、乳幼児発達臨床センター年報における「Is The Strange Situation too Strange for Japanese Infants?(ストレンジ・シチュエーションは日本の乳児にとって新奇すぎるか) (Ujiie, 1986) という論文である。1980年代でヒットした論文のほとんどは同年報に書かれたもので、この年報は北海道大学教育学部附属乳幼児発達臨床センターが発行している。当時、北海道大学に在籍した三宅和夫研究室により研究されていた (Ujiie, 1986; Takahashi, 1986; Nakagawa et al, 1989など)。三宅は1990年に北海道大学を定年により退職している。

Ujiie (1986) は、サッポロ研究と呼ばれた三宅研究室の一連のSSPを用いた日本人の母子を対象とした研究では、日本人特有の文化的背景がSSPとABC類型論の妥当性を制約し、(類型の妥当性を) 低下させることを明らかにしたと述べている。その後、Takahashi (1986) やNakagawa, Lamb, & Miyake (1989) の日本人母子を対象とした研究により文化差の存在は承認されているとする。

SSPの結果における文化差についてはGoody_xox (2018) が要点をまとめているが、文化横断的な研究により、欧米とそれ以外とで生育過程の経験における文化的な差によって子供たちは異なる反応を示す。Takahashi (1990) は生後12ヶ月から42ヶ月まで60名の乳児を追跡する縦断研究において日本人の母子が分離する経験が稀なものであるため、分離不安に対して高いレベルの反応を示すとしている。これらの比較は、当然ながら方法が同じであって初めて比較が可能となる。Ujiie (1986) によれば、西ドイツやイスラエルでの研究でも文化差は支持されたが、Sroufe (1985) によってサッポロ研究に理論的および方法論的な問題があると批判されたという。Sroufe (1985) が問題にしたサッポロ研究とは、Miyake, Chen, & Campos (1985) である。Miyakeらは、31組の日本人母子のアタッチメントをSSPで分類し、Aグループ(回避型)は0、Cグループ(アンビバレント型)は37% (アメリカでは1~2割) もいたと報告している。理論

面でSroufe (1985) は、「伝統的な東洋の新生児は気分の波が穏やかで動揺しづらく、動揺しても宥めやすい」(Freedman, 1974) を引用し、サッポロ研究で、落ち着かずに泣いたCグループの割合がアメリカよりも多いことに疑念を述べている。方法上の問題としては、生後1年間において短時間であっても乳児を一人きりにさせない日本の文化において、アメリカでは軽度の「日常的な」ストレス場面と言えるSSPは日本人にとって大きすぎるストレス場面なのではないか、という点であり、Takahashi (1990) が検証しようとした仮定の1つである。さらに、この結果を日本人の気質に直結させたMiyakeら (1985) の解釈を問題視し、現代的なキャリア志向に基づき西洋の母親のように時に12ヶ月で乳児保育を外注する34組の家族の結果では、Aグループ13%、B及びCは18%でアメリカのサンプルとほぼ同じ割合だった (Durett, Otaki, & Richards, 1984) ことを指摘している。つまり、子どもの気質ではなく、それまでの「関係性」がこれらの行動の要因であるとSroufe (1985) は指摘している。

サッポロ研究におけるSSPの具体的手続きは高橋の作成であったと氏家 (1989) は記しており、三宅 (1990) も「とりわけストレンジ・シチュエーションの実施にかんしての助言者であり協力者であった」と高橋について記している。それぞれの手続きとして書かれた内容をAinsworthと対比させたものが表3である。さらに氏家 (1989) は「また、どうしても退室できない時には続くエピソードを省略した (エピソード4については1組がエピソード6については4組が省略された)。エピソード4, 6, 7は、激しい泣きが見られた場合最大2分で打ち切り次のエピソードに移った。」としている。これらのエピソードの時間短縮や省略はAinsworthも認めていることである。三宅 (1990) によれば、Ainsworthらの研究で「強調された母親のセンシティビティの他に、生後1年における子どもの経験ということについて考えてきた。(中略) 子どもの気質的特徴が母親の子どもへのかかわり方、母子相互作用の質に影響を与えることによってストレンジ・シチュエーションにおける子どもの行動に間接的に影響を与えるであ

ろう (p.159)」と考えて気質について言及していると考えられることから、Sroufe (1985) とサッポロ研究の理論の相違は、母子相互作用に基づく経験が先か、気質が先かというニワトリと卵の問題を扱っているように思われる。

サッポロ研究に対するその他の批判として、Grossmannら (1989) が北海道大学在留中に伝えたエピソードとして、「(Grossmannが：引用者挿入) これらのビデオテープを見て、日本の母親はエインズワースらの手続きで指示された通りに行動していないと、いかにも実験者の事前の教示が不十分であるかのように批判した」と三宅 (1990) は述べている。さらに、三宅自身は手続きを遵守し、そのように見えたのは母親の緊張感や実験者への配慮によるものと述べている。指摘された母親の行動がどのようなものであったかは明らかではないが、「再会のエピソードにおいていかにも3分間弱の子供との分離の時間が長くて待ち遠しかったかのように、指示されたことも忘れてすぐ子どものそばに行く母親もあったし、子どもをなだめすかして、またおもちゃで遊ばせようとしてまだ十分に子どもの不安が静まっていないうちに床に下ろそうとして失敗し子どもの機嫌をいっそう悪くするような母親 (pp.140-141)」の行動を指しているのではないかと思われる。

表3：SSPにおける行動概要の比較

	登場人物	時間	行動の概要 (Ainsworth, 2015)	氏家 (1989)：文中に高橋によるとされる	三宅 (1990) p.123：引用文献としてAinsworth (1978)とされる
1.	母親 乳幼児 実験者	30秒	実験者が母親と乳幼児を実験室に案内して場を離れる。	実験者は母子を実験室に案内し、所定の位置につかせて退室する。	実験者が母子を実験室へ導入し退出する
2.	母親 乳幼児	3分	乳幼児の探索を母は見守り、必要であれば2分後に遊びに誘う。	母子2人だけで3分間過ごす。	母は子に関与しない。子は探索的に活動する

3.	見知らぬ人 母親 乳幼児	3分	見知らぬ人 (Stranger) が入室。初めの1分、静かにストレンジャーはその場にいる。次の1分、ストレンジャーは母と話す。最後の1分ストレンジャーは乳幼児に関わる。3分後、母はそっと退室する。	ストレンジャーが入室し、母親の隣の椅子に腰かける。初めの1分間は沈黙し、次の1分間は母親に話しかける。最後の1分間はおもちゃで子どもを誘い、相互交渉を試みる。子どもが側から離れないなどの理由で母親が退室できない時は、可能になるまで時間が延長された。	見知らぬ女性が入室し、最初の1分はだまっている。次の1分は母と話す。残り1分は子に働きかける。最後に母にそっと退出してもらう
4.	見知らぬ人 乳幼児	3分か それ以下	ストレンジャーの行動は乳幼児の行動に合わせる。	母親は子どもに気づかれないように退室し、子どもは最大3分間ストレンジャーと2人で過ごす。	最初の母との分離場面。見知らぬ女性は子にあわせて行動する
5.	母親 乳幼児	3分か それ以上	母親が入室し、ストレンジャーは退室。母親は乳幼児の機嫌を直し、落ち着いてもう一度遊びに向かうように関わる。それから母はバイバイを言いながら退室する。	母親がストレンジャーと入れ違いで戻り、2人で3分間過ごす。子どもが側から離れないなどの理由で母親が退室できない時は、可能になるまで時間が延長された。	最初の母との再会場面。母は子に働きかけなくさめる。それから再び遊ばせようとする。バイバイと言って母は退出する
6.	乳幼児のみ	3分か それ以下	児一人になる。	母親は再び子どもを残し退室する。子どもは最大3分間1人で過ごす。	2回目の母との分離場面
7.	見知らぬ人 乳幼児	3分か それ以下	ストレンジャーが入室し、乳幼児をあやす。	ストレンジャーが入室し、子どもの状態に応じて最大3分間一緒に遊んだり慰めたりする。	見知らぬ女性が入室し、子にあわせて働きかける
8.	母親 乳幼児	3分	母親が入室し、乳幼児を抱っこする。しばらくして見知らぬ人がそっと退室。	母親が再びストレンジャーと入れ違いでもどる。	2回目の母との再会場面。母が入室し、子に働きかけ抱き上げる。見知らぬ女性はそっと退出する

3. 筆者が関与したSSPについて

さて、筆者は1991年に大学2年生であった。当時、演習の授業の一環で「アタッチメント」に関心を有する筆者を含めた3名の学生を担当した助手とともに初めて三宅 (1990, p.123) の表 (三宅の表の一部を表3右列に記載) を参考に、学びたでのストレンジシチュエーション法を試行した。実験参加者は助手の親戚 (2歳) であり、場所は助手の自宅だったと

記憶している。三宅（1990）にはSSPの「手続きは満1歳代の子どもに適用できると考えられていたが、現在においては一般に1歳6ヶ月以下がこの手続きを用いるのに相応しい年齢であるとされている」とある。身近な幼児が2歳だったことも、1回目の分離で児が大泣きしたことも、エピソード4の途中で実験の中断を選択した理由であったと思う。家庭育児中の男児だった。この体験は鮮烈で、その後も縁あって、母子の情動調律や母子関係のクロスカルチャー研究の場に積極的に参加する中で、家庭訪問して授乳やおむつ替えのシーンをビデオに撮らせてもらったり、大学の観察室に来てもらい母が不在時の児の様子を観察させてもらったりした（伊崎，2003, 2015, 2017）。

今回、SSPの手続きを改めて調べた結果、筆者がこれまでSSPを実施したと考えていた研究は原著に即していないことが判明した。Ainsworthら（2015）は、付録に母親への教示の詳細を掲載し、母親に示す実験エピソードは全て文章化している。例えば、Ainsworth（2015）の付録I（母親への教示：pp316-318）には次のように記している（訳は筆者による）。

この説明文は、母親が部屋に到着し、中に入る瞬間からの出来事を説明する一連の教示です。部屋に入るまでの間は、初めての状況（ストレンジ・シチュエーション）で赤ちゃんを観察することについて質問があれば話し合い、上着を預けることもできます。先に進む準備が整ったら、観察室の入り口を案内し、実験室にお連れします。エピソード3（後述）まで、あなたは実験室に赤ちゃんと共にいなければなりません、その後は観察室に入り、ワンウェイミラー越しに赤ちゃんを見ても構いません。

このストレンジ・シチュエーションにおけるあなたの役割の重要な側面を強調したいと思います。1つは、普段通りに赤ちゃんに対して自然に応答しようとすることです。最初の3つの場面は指示があるまで赤ちゃんにおもちゃで遊ばせようと積極的に関わってはいけませんが、赤ちゃんからの働きかけ（笑いかけたり、近づいたり）には家でやるのと同じように、自由に応じてください。あなたが部屋にいて赤ちゃんが不機嫌など

きは赤ちゃんがご機嫌に戻るように普段通り関わっても大丈夫です。私たちは、不慣れな状況や初めて見るおもちゃに対する赤ちゃんの自発的な反応を観察したいのです。そのため、お母さんが赤ちゃんの関心をひいたり、介入したりすることのないようお願いいたします。一方で、お母さんが変な行動をしているように赤ちゃんが感じることも私たちは望んでいません。

つまり、実験室での態度を邪魔することなく、赤ちゃんが望むならいつものように赤ちゃんを安心させるというデリケートな課題をあなたにはお願いします。

エピソード 1. 母親、赤ちゃん、実験者。赤ちゃんとあなたを実験室に案内します。母親の腕の中という安全な場所から赤ちゃんが見せる新しい環境への反応を知りたいので、抱っこしたまま部屋に入って下さい。実験者は赤ちゃんを下ろす場所とあなたが座る場所を案内したら、いなくなります。

エピソード 2. 母親、赤ちゃん（3分間）。実験者が退室するとすぐにあなたは赤ちゃんがおもちゃに正面を向くように指定された場所に赤ちゃんをおろしてください。それから椅子のところに行き、雑誌を読むふりをしてください。もし赤ちゃんがあなたに向かって声を出したら静かに応え、もし動揺したり混乱したりしているような時には安心させてください。しかし、赤ちゃんの注意を惹こうとしてはいけません。赤ちゃんが新しい状況で何に興味を持つのかを知りたいのです。赤ちゃんが自発的におもちゃで遊び始めたり、部屋を探索したりし始めた時は3分間、邪魔せずにそのまましておきます。2分経ってもおもちゃで遊び始めない時は、壁をノックして知らせますのでおもちゃのところへ赤ちゃんを連れて行って赤ちゃんがおもちゃに興味を持つように試してください。しばらくして、椅子のところにあなたが戻ったら、もう1分間、赤ちゃんの様子を見たいと思います。

エピソード 3. ストレンジャー、母親、赤ちゃん（3分間）。女性のストレンジャーがあなたに簡単に自己紹介して、部屋を横切って決められた椅子のところまで行き、1分間静かに座っています。その後、ストレンジャーは1分間世間話をして、最後の1分

間は赤ちゃんの注意を惹こうとします。その間、あなたは椅子に座ったまま、ストレンジャーが話しかけた時にだけ応じてください。最初の2回の壁に対するノックはストレンジャーの活動が変わるタイミングの合図です。お母さんがいても何もしない中で、赤ちゃんが徐々にストレンジャーに対して注意を向ける様子を観察したいと思います。3回目にノックがあったら、あなたはそっと部屋を退室してください。できれば、あなたのハンドバックは椅子に置いたままにしてください。退室する際には部屋のドアは閉めてください。

エピソード 4. ストレンジャー、赤ちゃん（3分か、それ以下）。あなたは観察室に来てワンウェイミラー越しに赤ちゃんの様子を見ることができます。その間、ストレンジャーが赤ちゃんと一緒にいます。ストレンジャーだけがいる知らない部屋で、赤ちゃんが何に興味を持つのかを観察したいと思います。ある赤ちゃんたちは、お母さんがいなくなると動揺します。動揺が過度な場合はこのエピソードを中断します。もし、あなたがエピソードを止めたいと感じるなら、すぐさま私たちに伝え、部屋に戻ることができます。

エピソード 5. 母親、赤ちゃん（3分か、それ以上）。このエピソードを開始するときは誰かがあなたに知らせます。あなたは実験室のドアに向かい、ドアを開ける前に、閉じたドアを通じて赤ちゃんがあなたの声に気づくくらい大きな声で赤ちゃんの名前を呼んでください。一呼吸おいてから、ドアを開け、また間を取ってください。私たちはどのように赤ちゃんが不在だった母親を自発的に歓迎するのかを観察したいと考えています。この間のあと、赤ちゃんを迎えに行き、次のエピソードのために赤ちゃんがご機嫌になるようにしてください。最終的に赤ちゃんが落ち着いたら床におろし、おもちゃに興味を向けます。3分経つか、次のエピソードに移るのに十分なだけ赤ちゃんが落ち着いたら観察者が判断した時に壁をノックして知らせます。これが、部屋に赤ちゃんだけ残して退室するためのあなたへの合図です。

エピソード 6. 赤ちゃん一人（3分か、それ以下）。ノックの合図の後、赤ちゃんが

元気におもちゃに夢中になっているように見えるタイミングを選んで、立ち上がり、椅子の上にハンドバックを置いて、ドアに向かってください。ドアのところで一呼吸おいて、「バイバイ」と赤ちゃんに声をかけて、背を向けてドアを閉めながら部屋を退室してください。もう一度、ワンウェイミラー越しに観察室で赤ちゃんの様子を見ることができ、あなたが退室した時に赤ちゃんがどのように反応するか、知らない部屋で赤ちゃんが起こす全ての行動を観察したいと思います。赤ちゃんはかなり満足しているかもしれませんが、もし赤ちゃんがひどく動揺している場合はこのエピソードを中断します。

エピソード 7. ストレンジャー、赤ちゃん（3分、それ以下）。ストレンジャーが入室し、母親不在の中、さらにはひとりぼっちの後で、赤ちゃんがストレンジャーにどのように反応するのかを観察したいと思います。赤ちゃんが母の不在に落ち込んでいるならば、ストレンジャーが赤ちゃんの機嫌を直せるのかどうかを見たいと思います。どのような場合も、ストレンジャーと、もしくはストレンジャーがいるところでおもちゃで遊べるのかを見たいのです。

エピソード 8. 母親、赤ちゃん（3分間）。誰かがあなたに実験室に戻る時間であることを知らせます。すぐに部屋に戻って良いのですが、赤ちゃんが母親を見て自発的に何をするのかを見たいのでドアを開けたら一呼吸おいてください。それから、しばらくして赤ちゃんに声をかけ、抱き上げてください。私たちは、エピソードが終わったところであなたに知らせるために部屋に行きます。それまでの間、そこでやるのが自然だと思われることはなんでもやってください。

Ainsworthら（2015）は以上の教示文を事前に実験に参加する母親に示し、さらに実験室に向かう過程で質問に応じている。なお、Ainsworthら（2015）のTable 3.には30秒と記載があるが、この教示文中にエピソード1の時間は載っていない。

さて、ここまでのプロセスで、筆者らのSSP実験との相違点をいくつか指摘できる。例えば、原著では実験全体の説明は実験前に十分に説明され、文書で前述した教示が与えられているが、筆者らの場合は、事前には赤ちゃんの様子を観察したいという簡単な説明だけを与えており、実際にはエピソード1の実験室の中に案内した後で母親に表1を示しながら実験の流れを説明した。さらに、部屋の中におもちゃや椅子（もしくは座布団）を用意したが、赤ちゃんを下ろす場所や母親が座る場所としての説明はしていない。母親たちはおおむね赤ちゃんが興味をもちそうなおもちゃの前に子供を下ろし（あるいは靴を脱がせた後に入室を促し子どもは歩いて入室した）、母親とともに、もしくは後から入室した実験者が一連の流れを説明したのちに退室したところからエピソード1として考え30秒というエピソード1の時間設定も無視した状況を作り出していた。また、重要な手続きの軽視だったと思われる点は再会場面に関する母親に向けた教示である。表1ではエピソード5と7の再会場面において、母親は「ストレンジャーと入れ違いで戻る」としか書かれていないが、文章化された教示では「ドアを開ける前に外から大きな声で子どもに声をかけ、間を置いてからドアを開け、さらに間を開けること。不在の後、赤ちゃんがどのように母親に対して自発的な歓迎を見せるかを知りたい。」とある。筆者らの実験では、ドアを開放したままや低い間仕切りで簡単に出入りできないようにするなどの方法で「閉じ込める」ことをしなかった。筆者らが用いたプレイルーム自体が広いことも判明した。三宅のSSP研究では実験室のサイズが2m×3m（三宅, 1990）とあるが、原著では9×9フィート四方とあるので、およそ2.7m四方で、窓が2箇所、ドア1箇所の比較的狭い部屋をプレイルームと位置付けていることがわかる。三宅と原著では狭さという点で同じだが、正方形と長方形との相違点がある。筆者らの使ったプレイルームはいずれも原著よりも広く、鉄製のドアは重く、閉めることがためらわれた点で、実験場面の様子も異なっていた。その他、細かい点ではあるが、エピソード1において子どもが離れたら椅子に座り雑誌を読む

ように指示することもなかった。そのため、乳児が動揺していなくても母親は子どもに比較的近い位置に座ることが多かった。これも広さが関連していたかもしれない。壁際に椅子も置いてはいたが、座った母親は少なく、おもちゃからも距離があった。退室時の教示も曖昧だったため、エピソード6で「バイバイ」を言う親もいたが、言わずにそっと退室した親もいた。観察室付きのプレイルームの場合は、自分の不在時の様子をワンウェイミラー越しに見ることができたが、被験者の住所地に近い観察室がないプレイルームを使った撮影では、母親は自分が不在の時の子どもの様子を直截見ることができなかった（後に、撮影した映像はすべてダビングされ保護者に送付しているため、時間を経て研究に参加した母親は自分が不在の時の子どもの様子を見ることができる）。ノックの合図は行わず、目配せや声をかけてタイミングを知らせた点も異なる。

以上を総括すると、伊崎（2003）の研究はSSPを参考にしつつ、母親の軽微な不在（つまり、トイレやお風呂、ベランダでの洗濯物干し、玄関での来客対応、電話対応など、母の意識が子どもから逸れる「日常の短時間の分離」）を想定したもので、最初からSSPのアレンジを意図して実施した。具体的には、観察室においてあるお菓子を母親に取りに来てもらうという設定での分離であり、観察室で母親に「子どもの様子を見て行きませんか」と誘い、どの程度母親が子どもから離れられるかという母親の分離不安をテーマにした実験だった。これはSSPのアレンジと認識して実施したが、日本人母子の分離と再会をテーマとした研究には相違ない。一方で、近年の研究（伊崎・小林，2019他）ではSSPを意識したものだったにも関わらず、SSPの手続きに予期しない不十分な点が散見された。その結果、筆者らの研究結果をSSPを用いた先行研究の結果と単純比較することは困難であることが今回の文献研究により判明した。

考察

Ainsworthも少数の母子を対象に家庭における観察から研究を開始したとされる (Grossman & Grossman, 1989)。その経験から、Ainsworthは、母親が子どものニーズに寄り添った対応をするならば、secureと判定されるアタッチメントを発達させ、母親の行動が予見しづらいもの、または無応答であれば、secureに不足するアタッチメント関係を発達させると仮定した。白人の中流家庭で育てている生後1年目の終わりの赤ちゃんがアタッチメントシステムを発動させるのに十分な不安を与える環境として、見知らぬ部屋、ストレンジャー（見知らぬ人）と短時間の分離が設定された。

明らかに筆者らがSSPと考えて実施していた方法は、アタッチメントを発動させる要素となる見知らぬ部屋、ストレンジャーと短時間の分離が用意されているが、原著に即していない擬似SSPであった。先行研究の検討が不十分であったことが悔やまれる。厳密なSSPを含めた実験計画を立てること、日本の文化に適した「軽度なストレス状況」として日本で育つ子どもたちのアタッチメントを測定するものとして筆者らの擬似SSPは実験に参加した日本人母子の関係性を推測するツールとして適切であるかどうかの検討は今後の課題と言える。

誕生後の1年間の日々の経験をさせる環境が、多様な選択肢から子どもの行動を選択させ、生起させる。その環境に国の文化レベル、家庭レベル、母子間レベルで差があり、子どもの行動もまた幅を有するようになる。類型することは、非常に困難を伴うが、タイプに分かれることで「わかりやすさ」もまた得られる。タイプに分けるための方法が異なれば、正確に結果を比較することはできない。一方で、SSPの教示に記されたように、実験的な態度を損ねない範囲で、通常の反応と同様に子供に関わるという難題は「教示通りに行動していない」ように見える程度には文化差やこれまでの経験の差が含まれている。おそらく、どのような観察を行っても、全く同じ条件で観察を行うことは困難である。原著と同一の方法ではなかった点を具体的に記し、どこにアレンジが加わっているのかを明記

することは、方法によって結果に差が生じているのか、経験もしくは気質の違いによって乳幼児の行動、さらには母子の関係性に差が生じているのかを推定する上でも重要であると考える。

付記：伊崎（2003）を除くSSPに関する本研究は、JSPS科研費基盤研究（C）JP16K01880およびJP19K02618の助成を受けたものです。また、白鷗大学「人を対象とする研究の倫理審査」の承認（2019.5.20）を得て実施しました。

引用文献

- Ainsworth, M. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (2015). *Patterns of Attachment: A Psychological Study of the Strange Situation*. (Psychology Press & Routledge Classic Editions). (Original work published 1978; Taylor & Francis).
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss: Vol. I. Attachment*. Basic.
- Durett, M. E., Otaki, M., & Richards, P. (1984). Attachment and the Mother's Perception of Support from the Father. *International Journal of Behavioral Development*, 7 (2), 167-176.
- Freedman, D. (2017). *Human infancy: An evolutionary perspective*. Routledge (Original work published 1974; Lawrence Erlbaum Associates).
- Goody_xox (2018). Ainsworth strange situation Evaluation, <https://getrevising.co.uk/grids/ainsworth-strange-situation-evaluation>
- Grossmann, K. E, & Grossmann, K. (1989). Preliminary Observations on Japanese Infants' Behavior in Ainsworth's Strange Situation, 乳幼児発達臨床センター年報, 11, 1-12.
- 伊崎純子 (2003) 母親の子どもに対する分離不安：探索的研究, 白鷗女子短大論集, 27 (1). 141-154.
- 伊崎純子・小林順子 (2015). 乳幼児健診の場で関係性障害早期発見のための試み (第2報), FOURWINDS乳幼児精神保健学会第18回学術集会 (弘前) 発表論文集, p37
- 伊崎純子・小林順子 (2017). 乳幼児健診の場で関係性障害早期発見のための試み (第4報), FOURWINDS乳幼児精神保健学会第20回学術集会 (東京) 発表論文集, p36
- 伊崎純子・小林順子 (2019). 平成28-30年度 科研費報告書 関係性障害の予防を志向する基礎研究, 自費出版
- Miyake, K., Chen, S., & Campos, J. (1985). Infant temperament, mother's mode of interaction, and attachment in Japan. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 50 (1-2), 276-297.
- Nakagawa, M., Lamb, M. E., & Miyake, K. (1989) Psychological experiences of Japanese infants in the Strange Situation. 乳幼児発達臨床センター年報, 11, 13-24.
- 三宅和夫. (1990). 子どもの個性—生後2年間を中心に (シリーズ人間の発達5), 東京

大学出版会

- Sroufe, A. (1985). Attachment classification from perspective of infant-caregiver relationships and infant temperament. *Child Development*, **56**, 1-14.
- Takahashi, K. (1986). Examining the strange-situation procedure with Japanese mother and 12-month-old infants. *Developmental Psychology*, **22** (2), 265-270.
- Takahashi, K. (1990). Are the key assumptions of the 'Strange Situation' procedure universal? A view from Japanese research. *Human Development*, **33** (1), 23-30.
- 梅村比丘. (2017). 第4章 観察法 Part1 ストレンジ・シチュエーション法, 北川 恵・工藤晋平編著, 『アタッチメントに基づく評価と支援』, 誠信書房, 68-86.
- Ujiie, T. (1986). Is The Strange Situation too Strange for Japanese Infants?, 乳幼児発達臨床センター年報, **8**, 23-29.
- 氏家達夫. (1987). Strange Situationにおける愛着行動のパターンと分離前場面との関係について, *心理学研究*, **58** (2), 98-104.

